

輸出教育を超えて： 新たな国際化の在り方について

芝浦工業大学 国際部
杉村憲一

著者紹介：Nigel Healey

- 2020- アイルランドのリムリック大学 副学長（世界大学ランキング401-500）
- 2016-2020- フィジーのフィジー国立大学 副学長
- 20XX-20XX- ノッティンガムトレント大学 副学長代理
- - ・ 専門は高等教育の国際化、特に国境を越えた教育パートナーシップのマネジメント。
 - ・ デ・モントフォート大学（カザフスタン）理事会メンバー、欧州改革大学同盟諮問委員会メンバー、QSグローバル諮問委員会委員長。英連邦大学協会評議員、UKCISA評議員を歴任。

論文の概要

- イギリスの伝統的な国際化＝単純に外国人留学生を受け入れることを批判
- 外国人留学生の受け入れは、国際化（Internationalization）ではなく、あるべき国際化の姿を議論しています。
- 国際的な取り組み（International activity）であっても、国際化に繋がらない取り組みもあります。
- 大切なのは学生中心の国際化戦略（International Learning Experience）とを提唱しています。

Q.なぜそもそもイギリスで外国人留学生の
獲得（受入）が盛んになったのか

A. 国内学生に比べて高い学費を払う留学生を採用することで、大学の収益を大きく高めることができるから。

それによって学内の設備を良くしたり、国内学生の授業料を低く抑えることもできる。

<その他のメリット>

- ・ 中国では、自国ファンを作るために活用。
- ・ ロシアでは、大学ランキングの国際化の指標を高めるため。
- ・ アメリカでは、国外からトップに優秀な学生を獲得するため。

真に重要なのは留学生と学生を混ぜる教育環境 = International Learning Experience

なぜか？

現代のフラットなかつデジタルが広がった世界では、外国人の同僚、外国の取引先等とのやり取りが発生する。

その世界の中で、Highly employable global citizens（高い就労能力を持つ人間）になるためには、
自分と違う文化・背景を持つ人間と交流した経験、オントロジー（存在論）
ショックを受けることが必要である。

そのためには、**留学生と国内学生が混ざる教育環境・大学文化**が重要である。

カリキュラムの国際化

Internationalisation
of the
curriculum

Internationalisation
of the faculty

教員の国際化

International
learning experience
- to prepare
students to become
highly employable
global citizens

International
student mobility

海外留学

International
student support
and integration

留学生サポートと統合

International
student
recruitment

外国人留学生の獲得

本論文のユニークまたは特別な部分

著者が実際にInternational learning experienceを実現してきた中で得られた学びが余すことなく記載されている。（幾つか列挙）

1. 裕福な層は海外留学に行けるが、そうではない層は海外留学できない。裕福さによって、International Learning Experienceに格差が生まれる。
→ショートピリオドプログラムが有効。また収入条件付きの奨学金を実施した。
2. オントロジーショックの一番効果があるのは、留学や海外に後ろ向きな学生。ただそういった学生だからこそ、留学生と交流させることに難しさがある。留学生も同じ民族で固まってしまう。
→民族ごとにテーマを作ったフリーフードパーティーが有効だった。これが多くの学生の興味を惹いた。
3. 複数の国の学生を受け入れるのは一つの国から学生を受け入れるのに対して投資効率が悪い。International Learning Experienceを進めるうえでキャンパス内の多様性が大切
→例えばオーストラリアでは、
4. 教員や事務側が積極的でない。
→国際化は、マネジメントレベルに、国際に特化したPro-vice chancellorが必要。でないと、意味がない。

日本の教育への新しい視点

1. 留学生から学費を多く徴収するという点

（この論文の主旨とは少し異なるが）留学生から学費を多く徴収するというモデルの設計一応先進国ですし、一定の需要があると思う。競争力のある一部の国立大学から初めてもいいのではないかな。

2. 学内環境の多様性を重視した教育環境

学内環境の多様性を目標値にする点、直近、文科省から発表されたソーシャルインパクト創出支援事業でも多様性は指標にされていない。留学生全体での受入数は目標値になっていたが、多様性や国内学生との交流度合いが指標にされていない。が、そこそこが肝ではないかな。

芝浦工業大学のケース：

全体の学生数9000名程度に対して、短期含めて1800名程度留学生を受け入れているが、現状留学生と国内学生の交流に課題がある。交換留学や短期プログラムにおいては多様性を重視しているが、正規留学生においては特に指標はなく、中国人学生に偏っている。

おまけ：杉村が気に入った言葉

Internationalization is a process and a change of mindset, not a project to be managed to completion

国際化とはプロセスであり、考え方の転換である。
取り組んで完了させるプロジェクトではない。

(つまり、どこかで終わる/止まるものではないよ)